

南都本『平家物語』から見る二条天皇と藤原多子

— 卷一「二代后立給事付異国先例」 —

野見山 亜沙美

一

「二代后」は『平家物語』の多くの諸本が卷一に収めている章段である。主に近衛天皇と二条天皇の、両天皇の后となった太皇太后宮(藤原多子)をめぐる内容となっており、諸本の同章段についても山下宏明氏や橋口晋作氏による先行研究に詳しい。近衛天皇が崩御した後、隠棲していた多子を二条が臣下に探させるときに「儻かに高力士に詔じて、外宮にひき求めしむるに及んで」と、玄宗皇帝の宦官であった高力士の名を出し、玄宗皇帝が楊貴妃を求めさせたという『長恨歌伝』の一場面とリンクさせていることから、この「二代后」には白居易の「長恨歌」や陳鴻の『長恨歌伝』の影響が見られることは従来論じられてきた。しかし、南都本『平家物語』「二代后立給事付異国先例」の章段の末尾には、大半の諸本が「其間の御なからへ、いひ知れず哀れにやさしかりし御事なり。」と結んでいるのに対して、この文章を置かず以下本文を続けている。^③

二

この本文の存在については、渥美氏や山下氏が早くから指摘しており、特に山下氏は「其間の御なからへ」においての四部本、鬮諍録と屋代本の解釈の違いについて述べた後、南都本にはこの一文が存在しないこと、そしてその代わりに前述の本文が存在していることを指摘して、「(前略)「チカワセ」が「違わせ」「誓わせ」いずれであろうと、世評に対する多子の不本意を語る物語であるから、これも四部本や鬮諍録に近いものを見得る。」と述べ、「この点についてはまだ検討の余地がある」としているが、現在の南都本研究の中でも依然「南都本にのみ見られる独自記事が、どのような意義を持つのか」という点については未だ検討されていない。「長恨歌」や『長恨歌伝』の影響が見られるこの章段に、「楊貴妃」という単語をあからさまに用いているこの本文はどのような意味を持つのか。本稿では、「二代后」に見られる独自記事の必要意義を考え、南都本の性格を読み解く一つのアプローチとして考察を進めていきたい。

又此度、殊二時メキ給テ世ノ誘リニモ成ニケレバ、別当人道惟方ト聞ユル人「楊貴妃ノタメシ出キナズ」ト申ケルヲ、三河内侍キ、テ、オロ／＼申

出シタリケレバ、御硯ノフタニ

道ノベノ草ノ露トハ消ヌトモ浅茅ガ原ヲタレカ問ベキ

ト遊シタリケルヲ、御門御覽ジテ御返事ハナクテチカワセ給フ御事有ケ

リトナン。

南都本のこの場面には、諸本の同章段には登場していない人物が二人描かれている。まずはその登場人物から背景を探っていく。

一人目は、「楊貴妃ノタメシ出キナズ」という言葉を発表したという、「別当人道惟方ト聞ユル人」である。この「別当人道惟方」とは、当時粟田口別当であった藤原惟方のことであろう。惟方は『今鏡』や『古今著聞集』などに二条天皇の乳母子だと書かれている人物であり、『平治物語』では内裏から二条天皇が出ようとする際、

二条天皇を乗せた御車を怪しんだ兵士たちに「それは女房の出でらるる車ぞ。おぼつかなく思ふべからず」と言つて脱出を助けている。その後も惟方は二条の親政を推進したようで、高崎由理氏は「藤原惟方伝」にて

乳兄弟であり、その春宮時代から密接な関係を持つてい^(ママ)二条天皇が即位して後白河院政と対立しはじめるとつれて、二条天皇親政派の中心人物となり、(中略)二条天皇親政を推進するに余りに急進的であつたため失脚したのである。

と述べている。⁽⁷⁾二条と後白河との不仲の原因については、延慶本や長門本に「其故ハ、内ノ近習者、經宗、惟方ガ計ニテ、法皇ヲ輕シメ奉リケレバ」と、惟方と二条の外舅である經宗が後白河を輕んじたためであるとはつきり記述されている。⁽⁸⁾そして古活字本『平治物語』巻下「經宗・惟方遠流に處せらるる事 同じく召し返さるる事」には、

院は顯長卿の宿所に御座ありけるが、つねは御棧敷に出させ給て、行人の往來を御覽ぜられて、なぐさませ給けるに、二月廿日の比、内裏よりの御使とて打付てけり。

とあり、さらに『愚管抄』巻第五「二條」にも

後白河院ヲバソノ正月六日、八條堀河ノ顯長卿ガ家ニオハシマサセケルニ、ソノ家ニハサジキノアリケルニテ、大路御覽ジテ下スナンドメシヨセラレケレバ、經宗・惟方ナドサタシテ堀河ノ板ニテ棧敷ヲ外ヨリムズ／＼ト打ツケテケリ。カヤウノ事ドモニテ、大方此二人シテ世ヲバ院ニシラセマイラセジ、内ノ御沙汰ニテアルベシ、ト云ケルヲキコシメシテ、・・・

と、惟方が經宗とともに後白河在所の棧敷を外側から打ち付けたことと後白河を輕んじるような言葉が書かれ、それを聞いた後白河は泣きながら「ワガ世ニアリナシハコノ惟方・經宗ニアリ。コレヲ思フ程イマシメマイラセヨ」と清盛に仰せを

下したと言う。⁽⁹⁾また『十訓抄』下、十ノ三十五にも「別当入道惟方卿は、二条院の御乳母子にて、世に重く聞えけるが、悪しく振舞ひて、後白河院の御いきどほり深かりければ、出家して、配所へおもむかれにけり。」とあり、ほぼ同様の内容が『古今著聞集』巻第五にも見られるため、当時の惟方の存在は後白河をも脅威とさせるものであつたこと、二条を重んじ、後白河を輕んじていたこと、それによつて処罰を受けたことは間違いないのだろう。惟方はいずれも一貫して二条側の立場に描かれ、二条からの信頼も厚いものであつたことも想像に難くない。この「楊貴妃ノタメシ出キナンズ」という言葉は、楊貴妃の美貌に心を奪われ、国政をも揺るがせた玄宗皇帝に二条を例えるという、ややもすれば天皇批判とも成り得るものである。しかし、二条の失脚は惟方にとつてデメリットこそあれ、メリットは無いと言えよう。惟方が「悪しく振舞」つたことによつて身柄を拘束されるのは永暦元年(一一六〇)二月二十日、⁽¹⁰⁾そして多子が二条天皇の后として二度目の入内をしたのが同じく永暦元年の正月二十六日であり、拘束・配流される直前の話であると考えれば時期的にも問題はない。南都本はこの場面に「長恨歌」の世界観を取り込むと同時に、二条の近習者であり後白河を「輕シメ奉」つていた惟方を登場させることで、天皇批判的なマイナスの印象を和らげ、天皇としての二条の立場を危惧し案じた言葉に仕上げていのである。

二人目は、惟方の言葉を耳にして、多子自身にそれを伝えた三河内侍という人物である。三河内侍は『世継物語』の作者であると尊卑分脈に記されている藤原為業の女とされ、多くの勅撰集や歌合などに名を残す著名な歌人の一人であるが、歌集や歌合以外の記録は多くない。大谷文子氏は三河内侍が出席した歌合を年代順に追ひ、長承三年の「中宮亮頭輔家歌合」に「参河」と名を連ねてから「二条院内侍」や「女御家兵衛」と名を変え、建久六年の「民部卿家歌合」では「二条院参河内侍」となっていることから、「初め二条院に仕えて帝の崩後、一時女御家に仕えたもの」と考えた。⁽¹¹⁾そして、二条院に出仕していた頃の和歌の詞書に二条に伺候した旨が書かれていることから「彼女が内侍として二条院の側近くに仕え、しかも歌詠む女房として相当の位置にいた事」を明らかにした。父為業の友人であつた西行や、ともに二条院に出仕していた二条院讀岐なども関係があり、歌の贈答も見られるとい

う。多子と三河内侍の直接的な関係性については現段階では明白となっていないが、多子と近い場所に位置していてもおかしくはない人物であることは確かである。「二代后」の章段内で既に二首もの歌を詠んでいる多子が、さらにもう一首詠むこととなるきっかけに、二条の元に仕え、歌人としても名高い三河内侍の存在は適任であったのだろう。

また、三河内侍が惟方の言葉を多子に伝えたとき、「オロく申出シ」ていることにも注目したい。「オロく」とはこの場合「ごく大ざっぱであるさま。何とか形をつけたというだけのさま。大よそ。」という意味で捉えて良いだろう。三河内侍は惟方の言葉を「大ざっぱに」多子に伝えたのである。それならば、惟方が内侍に対して直接発した言葉であると考えより、惟方が他の第三者に向かって言った、もしくは独り言として漏らした言葉を内侍が偶然耳にし、大まかな内容を多子に伝えたと考えるほうが自然である。つまりこの場面は、多子の美貌に心を奪われ世の誇りとなったことにより二条の失脚を恐れた惟方が、親政の行く末を危惧して発した言葉を二条に出仕していた三河内侍が偶然聞きつけ、記憶した大まかな内容を多子本人に伝えた、ということとなる。惟方も三河内侍も時系列や関係性などに矛盾点のない登場の仕方をしているため、実際にあり得た話であるとも十分に考えることは可能である。だが、もし南都本の作者に相当する者による創作であったとするならば、なぜ二条と関係の深い惟方は、二条本人にその言葉を伝えなかったのか。楊貴妃ノタメシ出キナズ」という言葉は、惟方↓三河内侍↓多子↓二条という順番で消化・認識されていく。このように回りにくいとも言える過程をわざわざ辿ったのは、楊貴妃に見立てられた多子自身に歌を詠ませること、そしてその歌の内容自体に意味があるからではないだろうか。

三二

三河内侍の申し出によって惟方の言葉を知った多子は、「道ノベノ草ノ露トハ消ヌトモ浅茅ガ原ヲタレカ問ベキ」、つまり「たとえ道野辺の草についた露のように私の命が消えてしまったとしても、私を偲んで浅茅が原まで誰が訪れてくれるので

しょうか」という内容の和歌を詠む。惟方の言葉を受けて詠まれた歌であるので、多子自身も自らを楊貴妃に見立てて詠んだと考えて良いだろう。上の句の「道ノベノ草ノ露トハ消ヌトモ」は、玄宗を残して亡くなった楊貴妃、つまり二条に先立つ己の姿を仮定し、下の句「浅茅ガ原ヲタレカ問ベキ」では、玄宗が楊貴妃を喪った悲しみに明け暮れたように、自分自身を偲んでくれる人が居るのだろうか、自らの行く末を示唆しつつ案じた歌となっている。しかし、白楽天の「長恨歌」や陳鴻の『長恨歌伝』にも「玄宗が浅茅が原を訪れた」というような内容は載っていない。なぜ多子は楊貴妃という喩えを受けて浅茅が原と詠んだのか。

同じく多子が登場する章段に、巻五「月見」がある。南都本は零本のため巻二から巻五が現存していないが、覚一本を初めとして大半の諸本に収められている章段である。その「月見」の章段は、清盛が福原遷都を行った後、多子の兄にあたる徳大寺実定が旧都に残っていた妹を訪ねる場面から始まる。

其なかにも、徳大寺の左大将実定卿は、ふるき都の月を恋ひて、八月十日のあまりに、福原よりぞのぼり給ふ。何事も皆かはりはてて、まれにのこる家は、門前草ふかくして、庭上露しげし。蓬が袖、浅茅が原、鳥のふしどとあれはてて、虫の声々うらみつつ、黄菊紫蘭の野辺とぞなりにける。故郷の名残としては、近衛河原の大宮ばかりぞましましける。大将その御所に参つて、まづ隨身に惣門をたたかせらるに、……

旧都となってしまった京の都は、蓬が袖山のように生い茂り、茅萱が野原のように生え渡り、鳥のねぐらだらけといった、まさに荒れ果てた状態であった。そんな中、故郷の名残としては未だ近衛河原に住まわせていた多子の存在だけであった。その御所を訪れた実定は、妹多子を前にして

ふるき都をきてみれば あさぢが原とぞあれにける
月の光はくまなくて 秋風のみぞ身にはしむ

という今様を歌うのである。

この「月見」に関しては、すでに櫻井陽子氏が「⁽¹⁶⁾ここには「長恨歌」の世界が背景にあるのではないかと指摘している。櫻井氏は、平安時代より日本で流行した「長恨歌」や『長恨歌伝』が文学に取り込まれていったのと同時に、絵画や障子絵などにも受容され、その視覚的な表現は多く「楊貴妃の死後、悲嘆にくれる玄宗皇帝が楊貴妃の殺された場所に戻り、寂しく佇む構図であった」こと、さらにこれは日本人によって独自に消化、創作されていったものであることを推測し、「その風景も浅茅が原に秋風が吹きわたるといふ、甚だ日本的なものであった」と述べた。そして、その情景は

ふるさとはあさぢがはらとあれはてて夜すがらむしのねをのみぞなく⁽¹⁷⁾

おもひかねわかれしのべをきてみればあさぢが原にあきかぜぞ吹く⁽¹⁸⁾

などの歌によって定着し、浅茅が原に秋風が吹きわたるといふ情景が確立されていったのではないかと論じている。

さらに櫻井氏は、この情景が南都本の「道ノヘノ草ノ露トハ消ヌトモ浅茅ガ原ヲタレカ問ヘキ」という歌にも組み込まれていること、そしてこの多子の歌は

はかなくて野への露とは消ぬとも浅ちか原を誰をか尋ねん

という『月詣和歌集』巻九雑下876に収蔵されている太皇太后宮(多子)の歌を改作したものであろうことを述べ、「南都本作者は、「長恨歌」の日本における受容の一端につらなって叙述している」と考えており、この南都本独自記事における「長恨歌」の影響に関しても早くから指摘されていた。太皇太后宮(多子)の読んだとされる元の歌は、「浅ちか原」という単語こそ使われてはいるものの詞書には「題しらす」とのみあるため「長恨歌」を意識して作られたと断定するには難しい。だが、惟方の「楊貴妃ノタメシ出キナズ」という言葉を受けて詠んだという物語の流れが、この歌に「長恨歌」の世界観を色濃く反映したのである。

また、南都本作者が改変した歌と元の歌を比較してみると、上の句の「はかなくて」が「道ノベノ」、「野への露」が「草ノ露」、そして下の句の「誰をか尋ねん」が「タレカ問ベキ」となっていることが分かる。そこには、「月見」の章段に描かれた「何事も皆かはりはてて、まれにのこる家は、門前草ふかくして、庭上露しげし。蓬が柚、浅茅が原、鳥のふしどとあれはてて、虫の声々うらみつ、黄菊紫蘭の野辺とぞなりにける。」という、旧都のイメージが詠み込まれているとも考えられる。そうすると、この「二代后」の章段と「月見」の章段には、多子を中心にした一つの物語として繋がりを持つことになるのである。「月見」の章段現在、多子は二条に先立たれ、浅茅が原となった旧都の近衛河原に身を置いている。そしてその場所を兄の実定が訪れる、という流れは、「道ノベノ草ノ露トハ消ヌトモ浅茅ガ原ヲタレカ問ベキ」という歌をなぞらえたような内容となっている。前述したが南都本は巻五が欠巻していて「月見」の章段を確認することは出来ない。しかし、この「月見」は『平家物語』きつての叙情的章段と言われ、屋代本や四部合戦状本などは覚一本に比べて内容が簡略に描かれてはいるが、旧都の様子の表現の仕方や、多子の前で実定が今様を歌う点などは大半の諸本に共通している。そうであれば、比較的古代態を残す南都本にも同様の記述が存在していると仮定することは可能だろう。「二代后」の章段で「長恨歌」の影響を示唆し、それを詠み込んだ歌を載せることで、その後の「月見」での叙情感がより深く表される。南都本には、他の諸本には見られない他章段からの「伏線の回収」が秀逸に描かれており、さらにこの伏線を張るための立役者として、惟方や三河内侍の言動が生きてくるのである。

しかし、「長恨歌」で玄宗皇帝は楊貴妃に先立たれているのに対し、多子は二条に先立たれるという「男女の逆転」が起こっていることについて、言及を避けるわけにはいかないだろう。そこで、『平家物語』の中で「愛する女性に先立たれてしまう天皇」の例を探すと、二条と近い人物が存在していることに気付くのである。

四

橋口氏が「楊貴妃ノタメシ」という言葉が出てくるところなど、同じく『長恨歌伝』を踏まえている『源氏物語』の桐壺の巻風の恋愛物語になっている。」と指摘している通り、「又此度、殊二時メキ給テ世ノ誇リニモ成ニケレバ」という一文は『源氏物語』の桐壺巻を彷彿とさせ、さらに「楊貴妃ノタメシ出キナラズ」も、『源氏物語』桐壺巻の「楊貴妃の例もひき出でつべくなりゆくに」を引用していると考えられる。

この本文は『浜松中納言物語』にも「楊貴妃といふ昔のためし引き出でぬべかりけるを」と引用され、いづれも天皇が美しい后に心を奪われる場面である。伯父の妻であった多子の美貌に目をつけ、宮中に連れ戻して寵愛を施した二条の姿を、楊貴妃に心を奪われた玄宗皇帝だけでなく桐壺更衣を寵愛した桐壺帝をもなぞらえているのであれば、南都本は玄宗皇帝⇨桐壺帝⇨二条帝、楊貴妃⇨桐壺更衣⇨藤原多子という、二重の構造図式を意識して書かれていると考えて良いだろう。

『平家物語』の中で「女性を深く愛した天皇」といえばもう一人、二条の弟にあたる高倉天皇の存在を無視できない。高木信氏は、覚一本巻六「葵前」に「女をうんでも悲酸する事なかれ。男をうんでも喜歓する事なかれ。男は候にだにも封ぜられず。女は妃たり」という『長恨歌伝』からの引用があることから、

玄宗と楊貴妃の悲恋を描く『長恨歌』の引用は、『源氏物語』桐壺巻にあり、桐壺帝が桐壺更衣を寵愛しすぎたことが、「あぢきなう人のもてなやみぐさになりて、楊貴妃の例もひき出でつべくなりゆく」（桐壺①一八）とし、桐壺帝⇨玄宗皇帝、桐壺更衣⇨楊貴妃という関係が構築される。桐壺更衣が死去した後は、「明け暮れ御覧ずる長恨歌の御絵」（桐壺①三三）と繰り返すことで、生き延びた桐壺帝⇨玄宗皇帝、死去した更衣⇨楊貴妃と、その人物の相関が再確認される。『平家物語』の葵前もやがて死去するのであるから、玄宗⇨桐壺帝⇨高倉帝／楊貴妃⇨更衣⇨葵前という図式が完成されるかのようにみえる。

と、高倉と葵前の描かれ方に「長恨歌」や『源氏物語』との関連性を見出した。⁽²⁾つまり、覚一本を始めとする他の諸本では、高倉こそが玄宗皇帝⇨桐壺帝の流れを汲んでいると読み取ることが可能なのである。しかし、本論文はこの後に、

桐壺帝が桐壺更衣に対して、「人の譏りをもえ憚らせたまはず、世の例にもなりぬべき御もてなし」（桐壺①一七）をしたのに比して、高倉帝は「ただ世のそしりをはばからせ給ふによつて」（巻第六「葵前」①四二九頁）、葵前を召さなくなるのである。

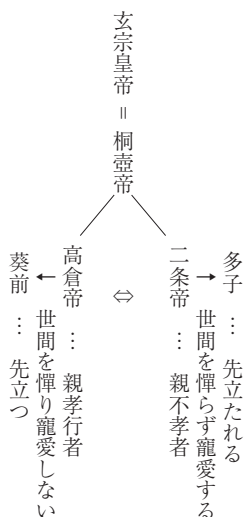
と続け、桐壺更衣と葵前に見られる愛され方の違いを指摘し、桐壺と高倉の死後の影響力なども相まって「桐壺帝（院）になれなかつた高倉帝（院）」を指し示してしまうことになった」と結んでいる。玄宗皇帝⇨桐壺帝は、寵愛していた楊貴妃⇨桐壺更衣を亡くす。だが高倉は、最愛であるはずの葵前を「ただ世のそしりをはばか」つたため、そして遠ざけたにもかかわらず平兼盛の「しのおれど」という求愛と取れる歌を贈つたため、恋に煩い、思い悩んだ葵前は結果的に命を落とす。この「葵前」の章段の作者が『源氏物語』を意識していた可能性に関しては全面的に同意であるが、高倉がここまで「世のそしりをはばか」つた理由のもう一つに、兄である二条が多子を二代后として迎え入れたこともあつたのではないかと考えることは出来ないだろうか。

兄の二条と弟の高倉は、『平家物語』の中でも対照的な存在として描かれている場面が多い。例えば、巻三「法皇被流」で、高倉が父の後白河が鳥羽に幽閉されたことをひどく悲嘆しているのに対して、「二条院は賢王にて渡らせ給ひしかども、天子に父母なしとて、常は法皇の仰せをも申しかへさせましましける」と評価している場面を、早川厚一氏は

『平家物語』における二条天皇・高倉天皇の造形は、常に天帝後白河と争い期待に背いた二条帝に対して、ひたすら天帝を氣遣う孝子高倉天皇という形でなされていることに気付く。

と指摘している。⁽⁵⁾このような対比の図が「葵前を寵愛しない高倉」という姿にも反映したと考えるのは、さほど飛躍的な考えではないだろう。葵前を遠ざけることで「世のそしりをはばか」った高倉に対し、宮中から退き隠棲していた多子を強引に迎え入れ、「世ノ誇リニモ成」るほどに寵愛した二条。この二人の対比関係は、愛する女性を置いて先立つ／愛する女性に先立たれる、という点でも成り立つこととなる(【図1】参照)。寵愛していた女性に先立たれた玄宗皇帝≡桐壺帝を中心に、多子を寵愛しながらも多子を置いて先立った二条／葵前を寵愛しないがために先立たれた高倉という対比関係は、他章段でも見られた二条と高倉の、不孝者／孝行者という対比関係を補強する役割を担う。そして、このような二条と高倉の関係性は、中央に玄宗皇帝≡桐壺帝の図式を置くだけでなく、南都本の「又此度、殊ニ時メキ給テ世ノ誇リニモ成ニケレバ」や「楊貴妃ノタメシ出キナズ」という本文を持って初めて完成する。つまり南都本には、二条／高倉の対比関係が他諸本よりも強調して描かれている可能性があるのである。⁽⁶⁾他諸本には見られない「二代后」の独自記事があることで、南都本には玄宗皇帝や桐壺帝をモチーフとした人物が二条、高倉と二人存在すること、そして世の誇りとなるほど多子を寵愛した二条と、その例を踏まえ世の誇りを憚って葵前を遠ざけた高倉の対照的な姿を強く描き出しているのだと考えられるのである。

【図1】



五

以上、南都本の独自記事を人物、和歌、モチーフの三方向から考察した結果、「楊貴妃ノタメシ出キナズ」という多子を楊貴妃に見立てたような惟方の言葉やそれを伝える三河内侍の登場は、多子の詠んだ「道ノベノ草ノ露トハ消ヌトモ浅茅が原ヲタレカ問ベキ」の歌に「長恨歌」の世界観を色濃く打ち出すための立役者の役割を担っており、その後福原遷都や二条に先立たれたことにより、浅茅が原に住居を置くこととなった多子の元を兄の実定が尋ねるといふ「月見」の章段の伏線となっている可能性を見出された。そしてこの独自記事は、今まで「親孝行者」と「親不孝者」として比較されてきた弟の高倉との、「女性を愛した天皇」という新しい対比関係を打ち出した。「長恨歌」の玄宗皇帝や『源氏物語』の桐壺帝と同じモチーフとして、多子を寵愛することで世間の誇りとなった上に多子を置いて先立った二条／世間の誇りを憚って葵前を召さなくなったことで葵前に先立たれた高倉という二重の対比構造の可能性が、南都本には見られるのである。

実定や高倉による「伏線の回収」は、もちろんその「伏線」となる本文を持って初めて活かされる。これは、南都本自身が持っている文学性の現れに他ならないだろう。これからも「文学」としての南都本の姿を探っていきたいと思う。

【注】

- 1 山下宏明「二代后(一)(二)(三)〔解釈と鑑賞〕一九六八年十月、十一月、十二月」
- 2 橋口晋作「二代后」をめぐって(『鹿児島県立短期大学紀要(人文・社会) 34号』一九八三年十二月)
- 3 南都本の本文引用は、高橋伸幸「南都本平家物語(翻刻)」(札幌大学教養部・短大部紀要 第12以降)による。引用文として読みやすいよう、旧字体は新字体に直し、濁点や句読点等を加えている。
- 4 渥美かをる『平家物語の基礎的研究』(笠間書院 一九七八年)
- 5 (注1)の論文より抜粋。
- 6 「チカワセ」が「違わせ」「誓わせ」のどちらであろうと「チカハセ」となり活用の問題が残るが、執筆者は「誓わせ」と漢字を充てて「そんなことはするまい、そんな風

- 17 『後拾遺和歌集』秋上270 道命法師。詞書「長恨歌の絵に玄宗もとのとこえおにかへりてむしどもなきくさもかれわたりてみかどなげきたまへるかたあるところをよめる」
- 18 『詞花和歌集』雑上337 源道齊。詞書「長恨歌のころをよめる」。また、『新日本古典文学大系9 金葉和歌集 詞花和歌集』(岩波書店 一九八九年)の脚注には、「道齊は長恨歌を素材に十首を詠んでおり、これは「馬嵬坡下泥土中 不見玉顏空死处」に拠る。」とある。
- 19 挙げた三首のいずれも(注15)の櫻井氏論文より引用した。
- 20 佐々木八郎『平家物語評議』(明治書院 一九六三年)、富倉徳次郎『平家物語研究』(角川書店 一九六四年)、櫻井陽子(注15論文)など。
- 21 富倉徳次郎『平家物語研究』中巻、「巻第五 月見」の解説には、多子と実定の対面
- 7 高崎由理「藤原惟方伝」(『立教大学日本文学』五十九号 一九八七年十二月)。また、『平家物語大事典』(東京書籍 二〇一〇年)も参照した。
- 8 『平家物語 長門本延慶本対象本文 上』(勉誠社 二〇一一年)。引用文は延慶本本文から。
- 9 『保元物語 平治物語』(日本古典文学大系 岩波書店 一九六一年)付録より。
- 10 『愚管抄』(日本古典文学大系86 岩波書店 一九六七年)より。
- 11 『源平盛衰記』には「永暦元年二月二十一日上皇内裏に臨幸ありて、清盛朝臣に仰せて、権大納言経宗別当惟方卿を召し捕られけり。」とあるが、『百鍊抄』には「二月廿日。院仰「清盛朝臣。擲「召権大納言経宗別当惟方卿於禁裏中。」とあり、古活字本『平治物語』にも「院は顯長卿の宿所に御座ありけるが、つねは御棧敷に出させ給て、行人の往來を御覽せられて、なぐさませ給けるに、二月廿日の比、内裏よりの御使とて打付てけり。上皇御いきどをりふかふして、清盛めされ、「主上はおさなぐまませば、是程の御はからひあるべし共覚えず。是しかしあがら経宗。惟方がしわざと思食。いましてまいらせよ。」と仰られければ、」とあることより、二月二十日が正しいとする。
- 12 大谷文子「二条院参川内侍」(昭和女子大学光葉会『学苑』第一五八号 一九五四年一月)。また、その仕えたとされる女御は藤原璋子であると同氏は指摘している。
- 13 『角川古語大辭典 第一巻』(角川書店 一九八二年)参照。
- 14 ノートルダム清心女子大学 古典叢書第三期 2 『正宗敦夫文庫本 長恨歌』(福武書店 一九八一年)より。『長恨歌伝』も同様である。
- 15 本稿では便宜上、一貫して覚一本の巻数と章段名を用いている。
- 16 櫻井陽子『平家物語』巻五「月見」をめぐって(『軍記と語り物』第21号 一九八五年三月)

- 22 (注2)の論文より抜粋。
- 23 『新編日本古典文学27 浜松中納言物語』(小学館 二〇〇一年)の頭注に「こは『源氏』桐壺の「楊貴妃のためしも引き出でつべくなりゆく」に類似」とある。
- 24 高木信「桐壺帝になれなかつた高倉帝」(『人物で読む『源氏物語』第一巻―桐壺帝・桐壺更衣』勉誠出版 二〇〇五年)より。
- 25 早川厚一「平家物語」の成立―鹿谷事件と二条・高倉両帝の造形について―(『名古屋学院大学論集』人文・自然科学編 第24巻 第1号 一九八七年六月)
- 26 「月見」と同様に、「法皇被流」も欠巻のため南都本では確認できない。しかし、後白河の幽閉を悲嘆する高倉に対して二条を「天子は父母なし」と評価している場面は大半の諸本に共通する。
- 『屋代本』や『百二十句本』には描かれていないということ、そして、「屋代本」では、単に近衛河原の大宮を訪ねて、実定は大宮に對面せず、ただ小侍従に会うことになっているので、これこそが古態であることは容易にわかるのである。」と書かれているが、百二十句本では訪ねてきた実定を多子が格子を上げて迎えておられ、屋代本には「待宵小侍呼出シ古へ今ノ物語シサ夜モ漸々深行ハ」とあるものの、実定が今様を二三回歌い澄ますと「大宮ヲ始進テ御所中ノ女房達皆袖ヲソヌラサレケル」と書かれ、実定の声を聞くことのできる距離に多子が居ることが推測できる。
- 【本文引用・参照諸本一覽】
- 覚一本…『新編日本古典文学全集46』(小学館 一九九四年)
- 流布本…『平家物語』(桜楓社 一九七七年)
- 城方本…『平家物語付承久記』(国民文庫 一九一一年)
- 百二十句本…『新潮日本古典集成 平家物語 上下』(新潮社 一九八一年)
- 屋代本…『屋代本平家物語 上中下』(桜楓社 一九七四年)
- 中院本…『校訂 中院本平家物語』(三弥井書店 二〇一一年)
- 両足院本…『両足院本 平家物語』(臨川書店 一九八五年)
- 延慶本…『平家物語 長門本延慶本対照本文 上中下』(勉誠社 二〇一一年)
- 長門本…『平家物語 長門本延慶本対照本文 上中下』(勉誠社 二〇一一年)
- 南都本…『南都本平家物語(翻刻)』高橋伸幸「札幌大学教養部・女子短期大学部紀要 第12―17号」
- 四部合戦状本…『訓読 四部合戦状本平家物語』(有精堂 一九九五年)
- 源平盛衰記…『新定源平盛衰記』(新人物往來社 一九九一年)
- 源平闘諍録…『源平闘諍録(上)(下)』(講談社学術文庫 一九九九年)